

2022年2月6日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 31 : 24～25

ルカによる福音書 20 : 45～47

「主を愛せよ」

<悪い人たち？>

たくさんの民衆が聞いている中で、イエスさまが弟子たちに言われました。

「律法学者に気をつけなさい。」

新約聖書では、しばしば律法学者やファリサイ派と呼ばれる人たちが登場します。

これらの人たちは、わたしたちで言う旧約聖書、つまり、「神の律法」の専門家です。神の律法とは、神さまに救われたイスラエルの民が、神さまの民としてふさわしく歩むために与えられた掟です。

律法学者は、それを人々が日常生活の中で、正しく守ることが出来るように指導する。また、生活の細かい所で、これはどう判断すれば良いのかな？と迷うような時には、律法を解釈して、こうすれば良い、と人々に教える。そういった、指導的立場の人々です。

ですから当然、彼らは指導者として、自分自身も律法を厳格に守り、人々のお手本となるような生活をしていました。元来、とても熱心で、まじめで、努力家の人々なのです。そして、神の律法に関する知識が豊富で、聖書に精通しています。

それで人々は、律法の導き手として彼らを頼り、信頼し、尊敬していました。律法学者は、自分たちの日々の生活を、神さまの律法に従って、神さまに喜ばれるものとして整えることを助け、導いてくれる人だからです。

さてしかし、わたしたちはルカによる福音書の中でも、律法学者たちが、いつもイエスさまに厳しく非難されていたことを思い起こします。

なぜなら、イエスさまの時代には、律法学者たちの間には、自分のステータスを誇る者。人々の尊敬を集めることを喜び、自分が重んじられることを求める者。また、律法を指導する立場ゆえに、自分たちの正しさこそ正義だと信じ、あの人、この人は律法を守っていない、汚れた者だ、罪人だ、と言って人を裁き、それらの人々を遠ざける。そのような者たちがいたからです。

さらに彼らは、自分たちの律法解釈の基準によって、神さまに遣わされた救い主、神の御子イエスさまを、一切受け入れようとしませんでした。しかも、神さまの御心を成し遂げようとしておられるイエスさまの御言葉や行ないを、反対に、神さまを冒瀆するものだといって批判し、失脚させ、殺そうとさえしていたのです。

ですからわたしたちは、律法学者がイエスさまに厳しく指摘されているところを繰り返し読んで、「ああ、律法学者って、なんて悪い人たちなんだ。」「なんて罪深く、傲慢な人たちなんだ。」そんな風に思っているかも知れません。

確かに、自分自身を誇ること。自分の立場が重んじられるように望むこと。自分の正しさに執着すること。人を裁くこと。弱い者を受け入れようとしないこと。これらは、今の時代のわたしたちの社会においても、傲慢で、貪欲で、好ましくないことです。

謙遜すること。人を安易に裁かないこと。弱い人を受け入れ、守ること。人としてそのように生きることが、社会において大切であるに違いありません。

しかし、イエスさまがここまで厳しく言われる一番の理由は、人としてどうこうというのではなく、何より、律法学者のこれらの態度が、「神さまの恵みから人を遠ざけるものである」ということです。

律法学者たち自身が、そのような態度によって、神さまの恵みから離れてしまう。イエスさまを救い主として受け入れず、神さまの救いの恵みを無にしようとしている。

それどころか。彼らが指導者であることによって、神さまの民である人々をも、神さまの恵みから遠ざけている。イエスさまは、そのことを何よりも非難しておられるのです。

それで、今日の御言葉の最後には、「このような者たち」、つまり、指導者たる立場によって、自分のみならず、他の人々までも神さまの恵みから遠ざけることは、「人一倍厳しい裁きを受けること」であると、注意を促しておられるのです。

#### <人の目、人の評価>

さて、今日の箇所、イエスさまが非難された律法学者たちの行ないは、どのようなものでしょうか。まず、「彼らは長い衣をまとって歩き回りたがり」とあります。

長い衣は、律法学者たちのユニフォームのようなもので、権威の象徴であり、ステイタスシンボルです。お医者さんの白衣とか、裁判官のガウンのようなもの、と言えばよいでしょうか。彼らは、それをまとって、歩き回りたがる。つまり、人々に見せびらかしたがる、ということなのです。

「また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。」とありました。これは、自分が人々に尊敬されること、重んじられることを求める、ということです。自分はそうされて然るべき地位の者である。特別扱いされる、特別な存在である。そういう自負があるのです。

「そして、やもめの家を食物にし、見せかけの長い祈りをする。」とありました。

「やもめの家を食物にする」。これは、色々な解釈があるのですが、たとえば、彼らは、やもめの生活が苦しいものと分かっているが、その親切な接待を当然のものとして、あぐらかいて受けている。あるいは、やもめの財産を管理してあげるときに、報酬を必要以上にせしめている、というようなことだと考えられています。

そして、「見せかけの長い祈りをする」。これは、自分の信仰深さ、熱心さ、立派さを人にアピールするために、人に見せつけるための、長々とした、立派そうな祈りをする事です。

つまりは、このいずれの行ないも、神さまを見つめているのではなくて、自分を見つめてなされているのです。自分が誉れを受けるように。自分が重んじられるように。自分が評価されるように。自分が人から印象良く思われるように。

そしてそのゆえに、本来は律法学者として、神さまの御心を行なうことを指導すべき人が、人々の目を気にして行動するようになっていく。神さまの御前に立って、神さまの目に適った、神さまが喜ばれることを行なおうとする心を、すっかり失ってしまっている、ということです。

<わたしたちも律法学者>

わたしたちはこれを聞いて、自分は律法学者とは違う。自分は、上席を好んだりしないし、むしろ控えめであることを好んでいる。人前で長々と祈ったりもしない。そんな風に考えるかも知れません。

確かに今の時代、わたしたちの間では、席に着く時は、上席を譲り合いすぎて、逆に末席の取り合いになっている。人前で祈ることも、遠慮したり、むしろしたくないと思ったりする。これは一見、律法学者たちと正反対の態度であるように思えます。

でも実は、「神さまの目より、人の目を気にしている」という心の根っこは、同じなのかも知れません。

末席に座るのは、偉そうな人と思われたくない。人前で目立ちたくない。控えめで、遠慮深い人として振る舞いたい、という思いから。

人前で祈ることを遠慮するのも、祈りの言葉を人に聞かれるのが恥ずかしい。立派な祈りが出来なくて、人に聞かれたくないと思うから。

これらもまた、結局は人の目を気にしている、人の評価を恐れている、ということなのかも知れません。

わたしたちは、常に自分に対する、周りの人々の目や、評価を気にするところがあります。人に良く思われたい、という思いがあります。誰だってそうでしょう。

基本的には、悪く思われたい人などいないのであって、人に良く思われること、良い印象を与えようとする事自体は、決して悪いことではないと思います。むしろ、人間関係を円滑にするために、必要なことかも知れません。

でも、わたしたちが思ったり、行動したりすることの動機が、神さまよりも、人の目を気にすることが優先になる。まず考えることが、神さまのことではなくて、人にどう思われるかが先立っている。こうなってくると、これは大変危険です。

律法学者で言えば、神さまの眼差しよりも、人の目を優先することで、神さまのことを教

え、人々を導くために与えられた知恵や知識、またその立場を、自分が人々に尊敬されるため、立派さを見せつけるためのものとして、使うようになりました。

また、神さまへと人々を導くための律法を、自分たちの正しさや立派さを主張するため、自分たちの思いに従わない者を排除するための基準として、用いるようになりました。

これはもう、神さまに仕えるために与えられたものを、自分のために使い込み、神さまに帰されるべき栄光を自分のものにして、神さまから奪い取っているのと同じことです。

また、このように神さまの眼差しを忘れ、目の前にいる人々の目を気にして行動するようになると、今度は人の目を恐れるあまり、心や行ないが縛られて、不自由になっていきます。

ルカ福音書の 19 章、20 章でも、律法学者たちが、民衆の目を気にして、人々を恐れて、何もできなかった、と繰り返し語られています。

そしてまた、わたしたちに覚えのある、見せかけの謙遜や、人前での祈りを洩ることも同じです。人の目を気にして、なすべきことが出来なくなる。神さまの喜ばれることを選べなくなる。いつか、そんな不自由さに捕らわれてしまいます。

本当は、自分がどこの席に座るかということよりも、弱い人や、小さい人の席が確保されているか。誰が、どこであれば、安心して共に座れるか。そういった隣人への配慮こそ、神さまが喜ばれることでしょう。

また共にささげる祈りも、人に聞かせるためではなく、思いを一つにして、神さまへの感謝と喜びを心からささげること。また、集えない人、祈りを知らない人のために、代わりに執り成しの祈りを、祈れる者たちで心を込めて祈ること。そのように、神さまに素直な思いを打ち明けたり、祈りを必要としている人を思って祈ることの方が、美しい言葉で祈ることよりも、ずっと大切なのです。

#### <神さまの眼差し>

わたしたちは、直接見えるもの、聞こえるものに捕らわれすぎています。

実際、直接人から褒められたり、評価されたり、大切にされたりすることは、とても気持ち良く、嬉しいものです。それは、自分が人から認められること、肯定されることであり、自分の存在意義が確認でき、心を安心させることが出来るからです。

しかし、一方で、わたしたちは評価されなければ不安になり、否定されれば落ち込み、傷つき、自分には価値がないと思ったりしてしまうのです。

でも、周りの人々は、人の本当の価値を知り、正しく評価することができるのでしょうか。

それに、今わたしが、人から何か評価されていることがあるとしても、それはわたしが永遠に持ち続けていられるものなのでしょうか。それを失ったら、わたしの価値はなくなるのでしょうか。人々を喜ばせることが出来なければ、役に立たなければ、わたしは評価されなくなるのでしょうか。

…わたしたちが、神さまの眼差しを忘れる時。わたしたちの視野はとても狭くなります。自分自身のこと、周りの人々のことばかりを見つめるようになります。

そうすると、人の評価が、自分の価値を決定することのように思ってしまうし、それゆえに、自分の価値を高めなければ、価値ある者にならなければ、それを人に示さなければ、と必死になっていくのです。

しかし、わたしたちは、世の人々が評価の基準にするような、立派さや、遠慮深さや、知識や、能力や、良い性格や、人の役に立つことや、そういったもののゆえに価値があるのではないのです。

むしろそれらは全部、神さまに仕えるために用いるようにと、神さまが一人一人に与えて下さったもの、神さまから預けられているものです。だから、それらのあるなしや、多い少ないが、わたしたちの価値を決めるものではありません。

わたしたちは、この命を、わたしという存在を、神さまがお造りになり、神さまが一人一人を、そのまま価値あるもの、愛すべきものだと言って下さるから、価値があるのです。

わたしたちの価値は、わたしたちをお造りになった神さまが認めて下さるものなのです。

わたしたちが、神さまにとってどれほどの莫大な価値があるか。それが最も現わされたのが、神の御子イエスさまの十字架です。

わたしたちは、神さまに逆らい、背き、遠く離れ、自分勝手に歩み、神さまを怒らせ、悲しませ、滅ぼされても仕方がない罪人だったのです。

しかし、それにも関わらず、神さまはわたしたちを救うために。罪を赦し、共に生きる者とするために。ご自分の愛する御子イエスさまの命を、わたしたちのために与えて下さいました。それほどまでに、わたしたちの存在を惜しみ、わたしたちを重んじて下さったのです。

神の御子の命を、わたしを救うために引き替えにする。それほどに、神さまはわたしたち一人一人を、価値高く、尊いもの。価値あるもの。かけがえのないものとして、見つめて下さっているのです。

わたしたちは、この神さまの眼差しの下で生きる時にこそ、自分の本当の価値を知ることが出来ます。神さまのことを知ると、自分がどれだけ愛され、どれだけ重んじられ、どれだけ慈しまれているかを、知らされるのです。

わたしたちに、たとえ知恵や力が無くても、貧しくても、弱くても、無力でも、それは、神さまにとっては、何の関係もありません。むしろ神さまが、必要に応じて、それを補い、満たし、十分に与えて下さいます。

神さまは、ただ、わたしを、わたしとして愛して下さっている。わたしを愛し、わたしの存在を喜んで下さっている。わたしたちの価値は、ここにこそあるのです。

<主を愛せよ>

ですから、この神さまの眼差しを忘れること。神さまを思うよりも先に、自分を高めよう

とする思い、人の評価を求める思い、人の眼差しを恐れる思いが優先してしまうこと。そういった律法学者の過ち、そしてわたしたちの過ちは、この神さまの愛を、恵みを、見失わせてしまうこととなります。それゆえに、イエスさまはこのことを厳しくお咎めになるのです。

わたしたちは自分を肯定するために、自分の存在価値を高めるために、多くのものを得ることや、誇れるものを持つようとし、また人から評価されることを求めます。

また、それらを自分の力で得ようと努力します。自分の力で手に入れたものは、とても確かなものに感じるからです。ですから、反対にそれらを失ったり、自分には何もないと思われされると、非常に落ち込み、存在意義さえ失ったと思ひ込みます。

また、人の評価が、自分を肯定するように思います。ですから、人から評価を得られなければ、簡単に絶望してしまいます。

しかし、わたしたちは、自分で手に入れたものは本当は何もなく、また誰一人、正しく、罪を犯さずに歩むことが出来ません。ですから、自分に価値を与えることも、人を裁くことも、人を評価することも、本当は誰にも出来ないのです。

それゆえに、イエスさまは、わたしたちがいつも神さまの眼差しの中で、恵みを注がれて生きていく、その位置に立っていなさい、と言われます。神さまの眼差しをこそ恐れ、神さまの御前に低くなり、恵みをひたすら受け取ること。あなたたちは、そこに立つことしか出来ないのだ、と言われます。

そして、神さまの愛と慈しみの眼差しは、決して変わることも失われることもありません。

それは、神の御子イエスさまが、十字架の死と復活の御業を成し遂げられ、わたしたちの罪を赦し、神さまと共に生きる、永遠の命への道を拓いて下さったことによって、まったく明らかなことです。

だから、わたしたちは、この神さまの眼差しを、まず第一に見つめる者になりたいのです。

今日読まれた詩編に「主の慈しみに生きる人はすべて、主を愛せよ」とあったように、主の慈しみに生かされているわたしたちは、心に思うすべての一番先に、行ないをしようとする一番先に、神さまを思う者でありたいのです。

神さまの眼差しを、わたしたちが受け止め見つめ返す時。わたしたちはそこにこそ、自分の存在の意味を、本当の居場所を、失われることのない平安を、見出すことが出来るのです。

そして、神さまを見つめること、神さまを愛することから、わたしたちは自分を愛することが、また隣人を愛することが、本当に出来るようになるのです。

## 【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは自分の思いや、人の評価を優先し、あなたを後回しにして、その豊かな恵みから、自ら遠ざかっています。しかし、あなたは、御子の命をも惜しまずに与えて下さるほどに、わたしたちを価値高く、尊い者として愛し、見つめて下さっています。

そのような神さまの愛と慈しみの眼差しを、忘れることがありませんように。そして、あなたが喜ばれることを第一に求めて、歩む者となることができますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン